

『清語易言』の漢語語彙（1）

竹越 孝

はじめに

本稿では、清代の満漢対訳教材『清語易言』（1766年）で用いられている漢語語彙を素描する。

『清語易言』（Manju gisun be ja i gisurere bithe）は不分巻一冊、巻首の序文末尾に「乾隆三十一年鑄黃旗蒙古歩軍統領衙門主事博赫解任養病之暇輯錄」とあることから、編者は蒙古旗人博赫（Behe）であると知られる。

この書は、基本的に満漢合璧形式による会話（問答）という枠組を用いつつも、実質的には満洲語の発音、正書法、文法についての概説となっている。その内容は、alambi（告げる）の諸活用形、綴りと発音のずれ、単語の口語音形、各種の呼応表現、語尾と接辞、派生表現、子音・母音の調音法、アクセントと母音調和、というように多岐にわたる。本稿ではこうした同書の特性を踏まえつつも、基本的には口語で記される漢語の語彙と満洲語の対応関係を問題とする。

本稿で用いたのは大阪大学総合図書館蔵刊本（Mn-390-13）である。その書誌データは以下の通り：冊大 24.0×15.2cm、封面なし、全 29 葉、半葉の匡郭 20.5×13.5cm、毎半葉 6 行、各行左に満洲語、右に中国語。本書の校注としては竹越孝・陳曉（2017）及び同（2018）がある。

以下における語彙記述の枠組としては太田辰夫（1958）を用いる。即ち、同書の章節番号から 10 を引いたものを基本とし、品詞ごとに章を分けて記述する。ただし、言及すべき語彙がない場合は節の番号を詰めるので、全同ではない。記述にあたって、同書に特有の文法用語は現代語の記述で通用しているものに改めた。

漢語語彙について述べる際には、それぞれに対応する満洲語にも言及する。満洲文字のローマ字転写は Möllendorff 式による。満洲語の文法体系は主として津曲敏郎（2002）に基づくが、必要に応じて河内良弘（1996）及び河内・清瀬（2002）をも参照する。例文では漢語語彙に下線を施し、〈 〉内に下線に対応する部分の満洲語語彙を示す。例文の番号は項目ごとに振り直す。

1. 名詞

1.1 接辞

“兒”

接尾辞としての“兒”はすべて本節で取り上げる。

“兒”は22例用いられており、うち“頭兒”が12例、“老家兒”が3例、“空兒”と“趣兒”が各2例ある。

対応する満洲語に共通する特徴は見られない。

- (1) 我念完十二個頭兒了 (4a3-4) 〈ujui〉
- (2) 別的頭兒上仍舊諗衣 (19a1) 〈ujude〉
- (3) 皆老家兒們口傳心受之條 (23b1) 〈sakdasai〉
- (4) 空兒之意 (18a5) 〈siden〉
- (5) 告訴什麼趣兒 (9a4) 〈yokto〉
- (6) 各自顧各兒告訴 (7a3) 〈beri beri〉
- (7) 糊里抹兒的告訴了 (8a2) 〈hūluri malari〉
- (8) 告訴了半截兒 (9b3-4) 〈aldasi〉

“頭”

“頭”は“上頭”“後頭”的形で用いられている。“上頭”については後述する。“後頭”は1例用いられている。

満洲語では“後頭”に名詞 amala (後ろ、後方) が対応しており、特に“頭”に対応するものはない。

- (1) 要後頭告訴 (7a1) 〈amala〉

“家”

“家”は“老家兒”的形で3例用いられている。

満洲語では“老家兒”に名詞 sakda (老人) の複数形 sakdasa が対応しており、特に“家”に対応するものはない。

- (1) 我把聽見老家兒們 (23b3) 〈sakdasai〉

“様”

“様”は1例用いられている。

満洲語では名詞 hacin (種類、様子) が対応している。

- (1) 乃另樣形象之意 (20b6) 〈encu hacin〉

1.2 方位詞

“上”

“上”は27例用いられており、うち7例が“～之上”的形を取るほか、“在～上”的形が4例，“從～上”的形が4例ある。

満洲語では、“～之上”的7例がすべて名詞 ninggu (うえ、上部) に与位格語尾が接尾した ninggude に対応するほか、“在～上”的4例は与位格語尾 -de, “從～上”的4例は奪格語尾 -ci に対応する。

- (1) 不該當之上 (17a3-4) ⟨ninggude⟩
- (2) 好愛之上 (17a6) ⟨ninggude⟩
- (3) 在實話上不算外 (21a3) ⟨gisun de⟩
- (4) 則在嗓上呑說之音 (24a1) ⟨bilha de⟩
- (5) 則從齒上吐說之音 (24a4) ⟨weihe ci⟩
- (6) 則從舌尖上說之音 (25b3) ⟨dube ci⟩

介詞を持たない場合は、与位格語尾 -de に対応するものが最も多く9例あるほか、属格語尾 -i に対応するものが1例、対格語尾 -be に対応するものが1例、また ninggu に対応するものが1例ある。

- (7) 清話上 (28b4-5) ⟨gisun de⟩
- (8) 畫上無所註 (23b2) ⟨bithede⟩
- (9) 若別的頭兒字上改諺的韻 (13a1-2) ⟨hergen i⟩
- (10) 獨拿頭一個頭兒字上講 (23b5) ⟨hergen be⟩
- (11) 再遇此五字上之比字諺摸之處 (15b5-6) ⟨ninggui⟩

“上頭”

“上頭”は3例用いられており、うち2例が“～的上頭”的形を取る。

満洲語では、後置詞 jakade (～のゆえに、～のために) に対応するものが2例、与位格語尾 -de に対応するものが1例ある。

- (1) 或者告訴的上頭麼 (5b2) ⟨alaradeo⟩
- (2) 告訴的上頭 (6a3) ⟨jakade⟩
- (3) 上頭 (17a2) ⟨jakade⟩

上の(3)は満洲語の呼応表現の紹介の中で単独で用いられている場合である。

“下”

“下”は14例用いられており、うち10例が“～之下”的形を取るほか、“在～下”的形が2例ある。

満洲語では、“～之下”的場合9例が名詞 fejergi (した、下部) に与位

格語尾 -de が接尾した fejergide に対応するほか, -de を欠く fejergi に対応するものも 1 例ある。

- (1) 倘若之下用 (16a3) 〈fejergide〉
- (2) 而且之下用又字 (16a5) 〈fejergide〉
- (3) 尚且之下有之處 (16b2) 〈fejergi〉

“在～下” の 2 例は fejergide と fejergi に対応するものが各 1 例あるほか, 介詞を持たない 2 例はいずれも fejergide に対応する。

- (4) 在第四個頭兒字下用 (18b6) 〈fejergide〉
- (6) 滿洲話內若在第五個頭兒字下 (12a6-12b1) 〈fejergi〉
- (5) 第五個頭兒字下 (19a2) 〈fejergide〉

“外”

“外” は 4 例用いられており, うち 2 例が “～之外” の形を取る。

満洲語はすべて後置詞 tulgiyen (～のほか, ～以外) が対応する。

- (1) 告訴之外 (6a3-4) 〈tulgiyen〉
- (2) 改說之外 (13b5) 〈tulgiyen〉
- (3) 餘外 (17a3) 〈tulgiyen〉

上の (3) は満洲語の呼応表現の紹介の中で単独で用いられている場合である。

2. 代名詞

2.1 人称代名詞

2.1.1 單数

2.1.1.1 一人称

“我”

“我” は 9 例用いられており, うち主語となるものが 8 例, 連体修飾語となるものが 1 例である。後者の場合は “我所～的” の形を取る。

満洲語はいずれも一人称代名詞单数 bi の変化形に対応する。主語となる 8 例のうち, 主格形の bi に対応するものが 7 例, 属格形の mini に対応するものが 1 例ある。連体修飾語となる例は属格形の mini に対応する。

- (1) 我先讀漢書來着 (4a1) 〈bi〉
- (2) 我告訴啊 (12a6) 〈bi〉
- (3) 我把記得的說說 (21b6-22a1) 〈mini〉
- (4) 我所學的話皆記得 (4a6) 〈mini〉

2.1.1.2 二人称

“你”

“你”は7例用いられており、うち主語となるものが4例、連体修飾語となるものが3例である。後者の場合は“你所～(的)”の形が2例，“你～的”的形が1例である。

満洲語ではいずれも二人称代名詞単数 si の変化形に対応する。主語となる4例は主格形の si に対応し、連体修飾語となる3例は属格形の sini に対応する。

- (1) 阿哥你讀什麼書呢 (4a3) 〈si〉
- (2) 只是你告訴麼 (6b2) 〈si〉
- (3) 阿哥你所學的話都記得麼 (4a5) 〈sini〉
- (4) 阿哥你說的雖是 (12a1) 〈sini〉

2.1.1.3 疑問

“誰”

“誰”は4例用いられており、うち目的語となるものが3例、連体修飾語となるものが1例である。

満洲語ではいずれも疑問代名詞 we の変化形に対応する。目的語となる場合は2例が主格形の we に対応し、1例が属格形の wei に対応する。連体修飾語となる場合は属格形の wei に対応する。

- (1) 告訴過的是誰呀 (9a6) 〈webio〉
- (2) 向誰告訴 (7b1) 〈wei baru〉
- (3) 誰根前告訴 (7b1) 〈wei〉

中国語の語成分と満洲語の格が一致していない例があるのは、満洲語では固定的な表現の場合に取りうる格が決まっているためである。

2.1.2 自称・他称・統称

“各自”

自称の“各自”は5例用いられており、“各自各自”的重ね型が2例，“各自顧各兒”的形が1例である。

満洲語では、一人称代名詞複数除外形の属格形 meni を連ねた meni meni (それぞれ) 及びその縮約形である meimени に対応するものが各1例、形容詞 beri beri (めいめい、ばらばら) に対応するものが1例である。

- (1) 各自各自告訴 (7a3) 〈meimeni〉
- (2) 各自各自告訴 (7a3) 〈meni meni〉

(3) 各自顧各兒告訴 (7a3) 〈beri beri〉

“他”

第三人称としての“他”ではなく、他称としての“他”が1例用いられている。

満洲語では形容詞 gūwa (他の、別の) が対応する。

(1) 於他話亦能照此調轉着說得來 (11b4-5) 〈gūwa〉

“別人”

他称としての“別人”は2例用いられている。

満洲語では、代名詞 weri (他人、別人) に対応するものが1例、形容詞 gūwa に名詞 niyalma (人) が後続する gūwa niyalma に対応するものが1例である。

(1) 被別人告訴了 (5a4) 〈weri〉
(2) 乃教令別人之意 (21a2) 〈gūwa niyalma〉

2.2 指示代名詞

2.2.1 事物

2.2.1.1 近称

“這”

“這”は3例用いられ、うち主語となるものが2例、連体修飾語となるものが1例ある。

満洲語では、いずれも指示代名詞近称の主格形 ere に対応する。

(1) 這是無告訴的麼 (5a2) 〈ere〉
(2) 這一向若是告訴過 (10a2) 〈ere〉

主格形 ere は指示形容詞的機能を持つ。

“這個”

“這個”は1例用いられ、目的語となる。

満洲語では、指示代名詞近称の対格形 erebe に対応する。

(1) 我畧不曉得這個 (12a4) 〈erebe〉

“此”

“此”は37例用いられており、うち主語となるものが1例、目的語となるものが2例、連体修飾語となるものが34例ある。

満洲語では、目的語となる 2 例が指示代名詞近称の属格形 *erei* に対応する。連体修飾語となる 33 例では、2 例が主格形 *ere* に、もう 1 例が終点形と思われる *ertele* に対応するのを除けば、特に対応する語彙はない。

- (1) 於他話亦能照此調轉着說得來 (11b4-5) 〈*erei songkoi*〉
- (2) 此小衣字 (18b6) 〈*ere*〉
- (3) 至到此時沒告訴麼 (4b6) 〈*ertele*〉

対応する語彙のない“此”的例は、ほとんどが満洲語の字母や単語を直接指示するものであり、満洲語と一对一の対応関係はない。

“此等”

“此等”は 5 例用いられ、いずれも連体修飾語となる。

満洲語では、いずれも指示代名詞近称主格形の *ere* に名詞 *jergi* (等級、種類) が後続した形に対応する。

- (1) 此等字 (24b2) 〈*ere jergi*〉
- (2) 此等字用在話首 (25a4) 〈*ere jergi*〉

2.2.1.2 遠称

“那”

“那”は 1 例用いられ、主語となる。

満洲語では、指示代名詞遠称主格形の *tere* が対応する。

- (1) 那是不告訴的 (5a2) 〈*tere*〉

2.2.1.3 疑問

“什麼”

“什麼”は 14 例用いられ、うち“作什麼”的形が 2 例、“怕什麼”的形が 1 例、“可不是什麼”的形が 1 例ある。単独で用いられる 10 例のうち、目的語になるものが 3 例、連体修飾語になるものが 7 例ある。

満洲語では、“作什麼”的場合、疑問動詞 *aina-* (何をする、どうする) の現在形 *ainambi* に対応するものと、疑問動詞 *aise-* (何を言う、何と言う) の不定形が副詞化した *aiseme* (なぜ、どうして) に対応するものが各 1 例ある。また、“怕什麼”は動詞 *aina-* の懸念形 *ainarahū* (どうなるのか) に対応する。

- (1) 必定告訴作什麼 (5a4-5) 〈*ainambi*〉
- (2) 正竟的不告訴另外的告訴作什麼 (10a6) 〈*aiseme*〉
- (3) 告訴怕什麼 (11a4) 〈*ainarahū*〉

“可不是什麼”には waka ci aina (違うならばどうする) というフレーズが対応する。aina は動詞語幹であるが、命令形と見ることはできない。

(4) 告訴過的可不是什麼呢 (11b2) 〈waka ci aina〉

目的語となる 3 例、連体修飾語となる 7 例はいずれも疑問代名詞 ai に対応する。目的語の場合、ai に対格語尾 be を伴うものが 1 例ある。

(5) 告訴有什麼呢 (5a6) 〈aibi〉

(6) 能勾告訴什麼 (11a3-4) 〈aibe〉

(7) 阿哥你讀什麼書呢 (4a3) 〈ai〉

(8) 告訴過的什麼原故 (6a6) 〈ai〉

“何”

“何”は 3 例用いられているが、いずれも目的語でありながら動詞に前置する文語の用法である。

満洲語では、疑問代名詞 ai に対応するものが 2 例、それに動詞 bi が結合した aibi に対応するものが 1 例である。

(1) 何愁告訴 (9a2) 〈ai〉

(2) 何從告訴了 (5a6) 〈aibi〉

aibi は本来「何がある」の意味を表すが、ここでは副詞的に用いられている。

“何等”

“何等”は 1 例用いられている。

満洲語では、疑問代名詞 ai に名詞 jergi が後続した ai jergi が対応する。

(1) 再話之首用何等字 (23a5) 〈ai jergi〉

2.2.2 場所

2.2.2.1 近称

“這里”

“這里”は 1 例用いられている。

満洲語では、指示代名詞近称の与位格形 ubade に対応する。

(1) 這里來告訴 (4b3) 〈ubade〉

ubade は ede よりも実義性が強いと考えられる。

“這邊”

“這邊”は 1 例用いられている。

満洲語では、名詞 ergi (方, 方向) に対応する。

(1) 這邊 (15a1) ⟨ergi⟩

2.2.2.2 遠称

“那里”

遠称としての“那里”は1例用いられている。

満洲語では、指示代名詞遠称の与位格形 tubade に対応する。

(1) 那里去告訴 (4b3) ⟨tubade⟩

tubade も tede よりは実義性が強いと考えられる。

“那邊”

“那邊”は1例用いられている。

満洲語では、指示代名詞遠称の cargi (あちら, 向こう) に対応する。

(1) 那邊 (15a2) ⟨cargi⟩

2.2.2.3 疑問

“那里”

疑問としての“那里”は2例用いられている。遠称と表記上の区別はない。

満洲語では、疑問代名詞 aibi の与位格形 aibide に対応するものが1例、疑問代名詞 ya (どの, 何の) に対応するものが1例ある。

(1) 往那里告訴去 (4b4) ⟨aibide⟩

(2) 從那里告訴來了 (9a2) ⟨ya deri⟩

2.2.3 時間

“多嗜”

“多嗜”は1例用いられている。

満洲語では、疑問副詞 atanggi (いつ) が対応する。

(1) 多嗜告訴 (5a4) ⟨atanggi⟩

“什麼時候”

“什麼時候”は1例用いられ、述語となる。

満洲語では、疑問代名詞 ai が名詞 erin (時, 頃) を伴った形に対応する。

(1) 趕告訴去什麼時候了 (11a2) ⟨ai erin oho⟩

満洲語との対応から見て，“什麼時候” はまだ語彙化していないと考えられる。

2.2.4 特殊

2.2.4.1 近称

“這樣”

太田（1958：307）で副詞に収められる「指示副詞」はこの節で扱う。

“這樣” は 5 例用いられ、うち述語となるものが 2 例、連用修飾語となるものが 2 例、単独で用いられるものが 1 例ある。

満洲語では、連用修飾語となる場合に、指示代名詞近称の *ere* に名詞 *durun*（様子、かたち）が後続し、道具格としての *i* が接尾した *ere durun i* の形に対応するものが 1 例ある以外は、すべて指示副詞近称の *uttu* に対応する。

- (1) 若是這樣 (4b1) 〈*uttu*〉
- (2) 忽而這樣告訴 (11b2-3) 〈*uttu*〉
- (3) 若這樣學 (22b6) 〈*ere durun i*〉
- (4) 這樣 (15b4) 〈*uttu*〉

“如此”

“如此” は 2 例用いられ、いずれも連用修飾語となる。

満洲語では、いずれも指示副詞近称の *uttu* に対応する。

- (1) 如此告訴有什麼說 (8b4) 〈*uttu*〉

2.2.4.2 遠称

“那樣”

“那樣” は 3 例用いられ、うち連用修飾語となるものが 2 例、単独で用いられるものが 1 例ある。

満洲語では、いずれも指示副詞遠称の *tuttu* に対応する。

- (1) 那樣告訴無依 (9a3) 〈*tuttu*〉
- (2) 那樣 (15b5) 〈*tuttu*〉

2.2.4.3 疑問

“爲什麼”

“爲什麼” は 2 例用いられ、いずれも連用修飾語となる。

満洲語では、疑問副詞 *ainu*（なぜ）に対応するものが 1 例、*aiseme*（な

ぜ、どうして) に対応するものが各 1 例ある。

- (1) 起初爲什麼不告訴 (5a2) 〈ainu〉
- (2) 從前爲什麼告訴 (5a6) 〈aiseme〉

“怎麼”

“怎麼”は 6 例用いられており、うち述語となるものが 1 例、連用修飾語となるものが 1 例あるほか、不限定を表す“任憑怎麼”“任平怎麼”“不論怎麼”“平的怎麼”の形が各 1 例ある。

満洲語では、述語の場合疑問動詞 aina- の過去形 ainaha に対応し、連用修飾語の場合疑問副詞 absi (どこへ、どう) に対応する。

- (1) 竟不告訴是怎麼了 (5b1) 〈ainaha〉
- (2) 怎麼告訴 (7a5) 〈absi〉

不限定のフレーズを構成する 4 例の対応はそれぞれ以下の通り：副詞 eitereme (どんなに、いくら) ; ai hacin i (どのような、どのように) ; yaya demun i (どのようでも) ; ai ocibe (どうなっても)。

- (3) 任平怎麼告訴什麼要緊 (10a4) 〈eitereme〉
- (5) 雖然任憑怎麼告訴 (10b6) 〈ai hacin i〉
- (4) 不論怎麼告訴吧 (10b5) 〈yaya demun i〉
- (6) 平的怎麼的告訴是 (11b1) 〈ai ocibe〉

“任平”“平的”の“平”はいずれも“憑”に通じるものであろう。

“怎”

“怎”は 2 例用いられており、“怎得”“怎敢”の形が各 1 例ある。

満洲語では、“怎得”に ainambahambi (どうにかする、何とかする) の先行形 ainambahafi (どうにかして) が対応し、“怎敢”に疑問代名詞 ai に gelhun akū (恐れず、敢えて) が後続した ai gelhun akū が対応する。

- (1) 怎得告訴 (7a5) 〈ainambahafi〉
- (2) 怎敢告訴 (10a3) 〈ai gelhun akū〉

なお、満洲語では可能を表す言い方として bahafi を本動詞に先行させる形があり、(1) の ainambahafi もそれに関連する表現と思われる。

“如何”

“如何”は 4 例用いられており、うち連用修飾語になるものが 3 例、述語になるものが 1 例ある。

満洲語では、連用修飾語の場合、疑問副詞の adarame (どう、どうよう

に）に対応するものが 2 例、疑問代名詞 aide（どこに、どうして）に対応するものが 1 例あるほか、述語の場合は疑問形容詞 antaka（どんな、どうか）に対応する。

- (1) 如何告訴 (5a3) ⟨adarame⟩
- (2) 倘若不告訴如何得知道 (8b6-9a1) ⟨aide⟩
- (3) 告訴了的如何 (6b1) ⟨antaka⟩

“何等様”

“何等様”は 1 例用いられている。

満洲語では、副詞 oihori（いい加減に、軽はずみに）が対応する。

- (1) 何等様的告訴來着 (9a6) ⟨oihori⟩

満洲語 oihori は感嘆文に用いられて「何とまあ」という派生的な意味を表す場合がある。

“怎麽様”

“怎麽様”は 2 例用いられており、いずれも述語となる。

満洲語では、疑問動詞 aina- の条件形 ainaci に対応するものが 1 例、動詞 umainai-（どうする）の不定形 umainame に対応するものが 1 例ある。

- (1) 倘或説告訴過可怎麽様 (10a5-6) ⟨ainaci⟩
- (2) 告訴了並不能怎麽様 (11a4) ⟨umainame⟩

(1) では動詞 o-（なる、できる）の未来形 ojoro, (2) では動詞 mutembi（できる、よくする）の否定形 muterakū が後続し、いずれも可能表現を構成する。

(待続)

参考文献

太田辰夫 (1958) 『中国語歴史文法』、東京：江南書院；(1981) 朋友學術叢書版；(2013) 新装再版。

河内良弘 (1996) 『満洲語文語文典』京都：京都大学学術出版会。

河内良弘・清瀬義三郎則府 (2002) 『満洲語文語入門』京都：京都大学学術出版会。

竹越孝・陳曉 (2017) 「校注『清語易言』」、『神戸外大論叢』67(4): 29-70.

竹越孝・陳曉校注 (2018) 『一百條・清語易言』、早期北京話珍本典籍校釈与研究/早期北京話珍稀文献集成、全 3 冊、北京：北京大学出版社。

津曲敏郎（2002）『満洲語入門 20 講』東京：大学書林。

Möllendorff, P. G. von (1892) *A Manchu Grammar, with Analyzed Text*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.